桜ノカタミ

紫藤玖藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜ノカタミ

【Ｎコード】
Ｎ６２５２Ｐ

【作者名】
紫藤玖藍

【あらすじ】
寂れた神社でサボっていた俺の前に現れたそいつはただ者じゃなかった！？

episode1（前書き）

桜ノカタミはフィクションです

episode1

「お前、変な奴だな。」
和服に身を包んだ小学1年生くらいの少女がいきなり声をかけてきた。
こんな格好、今時七五三くらいでしか目にしない。
俺は自分をよく見返して見たが変な所など微塵もない。
普通の男子高校生で、手に文庫本を持っている限り読書に耽っていた様にしか見えない。
まあ場所と時間にもよるのだが。
今は午前１１時、普通ならまだ授業中だろう。
そしてここは参拝客もいなくなった寂れた神社の裏だ。
つまり俺はサボリの真っ最中なのである。
何故こんな所でサボっているのかはさて置き。
「お前こそそんな所で何してるんだ？」
俺は立ち上がって声をかけた。
目の前には大きな桜の木がある。目測だが5～６mは超えているだろう。
冒頭の台詞はそんな桜の木の上から降ってきたのである。
この状況だと明らかに変なのはこいつの方だ。
あの格好でよくあんな所まで登れたなと内心感心しながら、俺はゆっくり腕を上げた。
「危ないから降りてこいよ。」
そいつは普通に飛び降りてきた。
落とさないようにしっかりと抱きとめたのだが何だか違和感がある。
重さが全くなかった。

episode2（前書き）

一応連載ですが一話一話は短いので気軽に読んで下さい。

episode2

おかしい。明らかにおかしい。
重さが全くないなんて生き物として有り得ない。
それに何だ？抱いているはずなのに腕には何の感覚もない。
「お前何者なんだ？人・・・・・・ではないよな？」
俺の首に手を回してそいつは言った。

「わらわは神じゃ。」

俺は言葉を失った。
自分が抱いている者が人じゃない事だけでなく、そいつは自分を神様とか言い出したんだから無理もない。
「わらわの名は桜と姫と書いておうひめじゃ。お前の名は？」
「早坂・・・・・春って書いてしゅん。」
「そうか、春か。」
そう言うと桜姫は嬉しそうに笑った。
見た目は子供にしか見えないがこうして見るとやはり神様っていうのは冗談かも知れない。
じゃあ何故重さがないのか説明がつかない。
やはり本当なのだろうか。
「お前疑ってるな？」
考えを読まれていたのか桜姫は俺を不機嫌そうに見つめていた。
神様かどうかはさて置き、こいつは人ではない。
甘く見ていると何があるかわからない。
とりあえず大丈夫なように常に警戒しておこうか。
「わらわはちゃんと神なのじゃ。」
口調はともかくだだをこねている姿はやっぱり子供だった。

こんな所でサボっていて今更なのだが今は真冬、流石に寒さが身に滲みる。
そろそろ帰ろうと思い、立ち上がった。
歩き出そうとするといきなり金縛りにあった。
恐らく犯人は桜姫だ。
「明日もお前はここに来るのか？」
「・・・・・・多分な。」
それを聞きたいが為にわざわざ金縛りをかけたのか、こいつは。
怒ろうと思ったその時桜姫の笑顔が目に飛び込んできた。
「待っておるぞ。」
俺はそれには返事をせずに家に帰った。
・・・・・・・お供え物はいるのだろうか。

ｅｐｉｓｏｄｅ３（前書き）

今回もよろしくです

episode3

次の日、俺があの場所に行くとまたしても桜姫は桜の木の上にいた。
ぼんやりと空を見ながら足をブラブラさせている。
声をかけようかどうしようか迷っていたら先に声をかけられた。
「春、また来てくれたのじゃな？」
どうやら待っていてくれたらしい。
とりあえず上に向かって手を振ると、俺の腕めがけて桜姫が飛び降りてきた。
・・・・・・やはり軽い。
いや、この表現は間違いかも知れない。
軽いも何もこいつには重さなんて最初から存在しないのだから。
「何やらいい匂いがするのぅ。」
きっと俺の持っている包みの事を言っているのだろう。
神様であれ何であれ、手土産位必要かと思って桜餅を買ってきたのだ。
「食うか？桜餅。」
桜姫の顔がぱっと輝いた。

口一杯に桜餅をほおばっている桜姫はやはり普通の子供みたいだ。
本人は神様とか言っているが妖怪とか悪霊の類だったとしたら少し怖いと思う。
まあ目の前の小さな子供に何か俺に害を及ぼすかなんて考えるだけ無駄かも知れないが。
この桜餅で頬をふくらませている子供に悪い事など出来るものか。
「わらわはちゃんと神様じゃぞ。」
「口の周りにあんこつけて言う事か、それ。」
そう言いながらあんこを拭き取ってやる。

桜姫は顔を赤くしながら、俺を睨んだ。
「よし、神様らしく崇る事にしようか。」
「桜餅くれた相手に？崇るのか？」
神様を脅す俺も大したものだ。
普通なら怖じ気づく所なのだろうけど俺は少し感覚がおかしい様だ。

episode4

桜姫と別れて家に帰ると担任から電話がかかってきていた。
いつもの事だが親はいない。
自分の部屋に入り、椅子に腰掛ける。
机の上にはきれいに教科書が並んでいる。
だがそれも見てくれだけだ。
開くと中は俺を罵倒する言葉が活字を遮って目に飛び込んでくる。
そう、これが俺のサボリの理由だ。

原因は些細な事だった。
クラスのリーダー的存在の不良の機嫌を損ねた、それだけだ。

俺は机に肘をつきため息をついた。
明日はテストだ。
イジメをするような卑怯者達に負けて留年するのはプライドが許さない。
でもプライドを上回る恐怖が頭も体も支配している。
親は仕事でなかなか家に帰ってこないし、担任は何の助けにもなってくれなかった。
「どうすればいいんだよ・・・・・・・・っ!!」
ふいに桜姫に会いたくなってきた。

桜姫は俺を見てキョトンとしている。
それもそうだろう。
俺達はついさっき別れたばかりなのだから。
それに走ってきたせいで制服も乱れまくっている。
「どうしたのじゃ春、そんなに息をきらせて。」

桜姫が俺の顔を覗き込んでいる。
俺は桜姫の顔を見て言った。
「桜姫に会いたかったんだよ。」
桜姫は顔を紅潮させた。

桜姫を膝に座らせ、ほっと息をつく。
座らせている感覚はないのだが妙に落ち着く。
桜姫はさっきからずっと不思議そうにしている。
「何かあったのか春。」
桜姫にはイジメの事は言ったって分からないだろう。
俺は黙っている事にした。

どれほどの時間そうしていたのだろうか。
気が付くと辺りはかなり暗くなっていた。
流石に帰らないとやばい。
「そろそろ帰るよ桜姫。」
膝から下ろすと桜姫は言った。
「嫌な事があればいつでもわらわに申せ。」
そしてにっこり笑った。
俺は黙って頷いた。
桜姫に会って不思議と気持ちが楽になった。
明日は学校に行こうと思う。

自分の事で頭がいっぱいになっていた俺は別れ際、桜姫がふと悲しげな表情を浮かべた事に気付かなかった

episode5　前編

次の日俺は学校へ行った。
教室に入った俺への視線は相変わらず冷たいものだった。
それでも俺は構わず自分の席についた。
机の上は教科書同様散々な事になっていたが、テストを受けるだけなら問題ない。
黙って座っていると後ろから蹴りを入れられた。
「よーお早坂君、よく学校来れたな。」
俺のイジメの根源の吉本だ。
見るからに不良といった格好をしている。
机の下で足が震えだした。
やっぱり恐怖には勝てないみたいだ。
でも・・・・・・。
俺は逃げようとは思わなかった。

チャイムが鳴った。
「お前放課後、顔を貸せよ。」
吉本はそう言って俺の席を離れた。

テストは何とか乗り切った。
後は呼び出しに応じるかなのだがそれは問題ない様だ。
こっそり帰ろうとした俺の前には吉本とその腰巾着共が立ちはだかっている。
吉本がニヤリと笑った。

「俺の呼び出しを無視しようだなんて、いい度胸だなぁ！！」
そう言って俺の腹に拳を叩き込む。

俺は小さく呻いて体をくの字に曲げた。
膝を付きそうになったが吉本の腰巾着が後ろから抱え込んでいてつけなかった。
「何とか言えよコラ！！」
吉本は俺が黙っている間も容赦なく暴行を続けた。
腰巾着共は吉本の激しい暴行に俺を抑えきれず手を離した。
俺はその時決意した。
拳を強く握りしめ、足を踏ん張った。
そして腕を振り上げた。
次の瞬間吉本は軽く宙に浮き、すぐに地面に叩きつけられた。
吉本はそのまま気絶した。

俺は急いで桜姫の所へ行った。
いつもなら学校をサボっているから今頃は桜姫と一緒にいる時間帯だ。
学校へ行く事は告げてこなかったから心配しているかもしれない。
石段を駆け上がり、息を切らせて桜の前に行った。

桜姫はいなかった。

episode5　後編（前書き）

ついに最終回です。

episode5　後編

桜姫と会わなくなってから二週間が過ぎた。
もうすぐ三月になる。
吉本は俺に殴られたのがかなりこたえた様で、あれからちょっかいはだしてこない。
留年は免れたし、イジメも軽くなった。
俺としては万々歳の結果のはずなのだが何か足りない。
桜姫は会ってそう時間も経っていなかったしたった数日少し話しただけの関係だ。
それなのに何なんだ、この喪失感。心に穴が空いたみたいだ。

そこにあいつはいないとわかっていても足は俺をそこへ連れて行く。
今日もそうだ。無意識にここに来ている。
桜の木の前に女の人が立っていた。
桜姫でなかった事に少し落胆しながら目を凝らした。
和服にどうも見覚えがある。
女の人は俺に気づいたのか、こっちを向いた。
「春か、何だまた来たのか。」
顔は大人びていたが紛れもなく桜姫だった。
意外と美人で思わず顔が紅潮する。
「ここ最近見かけなかったけど、どうしてたんだよ。」
そう言うと桜姫は少し笑った。
「わらわは神じゃぞ、そう何度も人の前に姿を現す訳がなかろう。」
静かに、静かにそう言った。
何か変だ。
俺が不思議そうにしていると桜姫は両腕を前に出した。
「また抱いてはくれぬか？」

俺は黙ってそれに応えた。

「春はわらわが本当に神なのか疑っておったのう。」
俺の首に腕を回し、桜姫が呟いた。
黙ったままでいると桜姫は桜の木に向かってすっと手を振った。
枝についていた蕾がゆっくりとその身を開いていく。
しばらくすると俺達のいる場所は桜の花びらで薄いピンクに染まった。
俺は驚きのあまり言葉を失った。
「これで最後じゃ春。」
桜姫はぼそっと言った。
「何がだよ？」
「この桜が花をつけるのはこれで最後なのじゃ。」
そう言う桜姫の頬には涙が一筋零れていた。
何だか嫌な予感がする。
こいつまさかこのまま消えたりするんじゃないか？
そんな疑念が俺の中を支配した。

「この桜が死ねばこれに憑いているわらわも消える。」
そう言う桜姫の足元はもう透け始めていた。
俺は必死に桜姫を抱き締めた。
逝ってほしくない、消えてほしくなかった。
頬を温かいモノがすっと流れていく。
「泣くでない春よ、最後に本当の姿で会えて良かった。」
「最後とか言うなよ、素直に消えんなよ、いつもの態度でかい桜姫はどうしたんだよ！！」
もう感情の抑えが利かなかった。
その時ふと柔らかいモノが唇に触れた。
「また別の姿で会いにいく、その時までしばしの別れじゃ春。」
大きな風が起こって、桜の花びらを吹き上げていって思わず目を閉

じた。
目を開けた時には桜姫は消えていた。
空っぽになった腕を見ていたら涙がとめどなく溢れてきた。
俺はしばらく一人で泣いた。
子供の様に声をあげて泣いた。

「早坂！！」
後ろから声をかけられた。吉本だ。
「その・・・・・・・悪かったよ・・・・・・・・いいパンチしてんな、お前。」
俺は苦笑いした。
桜姫が消えてから本当の桜の季節がやってきた。
クラスにも馴染んで、サボったりもしないちゃんとした学生生活を送っている。
でも俺は今でもあの場所を訪れる。
もしかしたらあいつが戻ってきているかも知れないから。

ＥＮＤ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6252p/

桜ノカタミ

2011年10月8日13時07分発行